



うそつ木

ふじまる

「あんまり嘘つくと、その内に根が生えて、腕が葉っぱになって、木になっちゃうわよ」

僕が嘘をつくとお母さんはいつもそういつて怒る。

人間が木になるなんてそんなことあるはずないって僕は言うけど、お母さんは実際木になった人を見たことがあるらしい。

それは町はずれの丘にある木だった。お母さんの子供の頃、嘘ばかりついていた同級生の男の子が木になったのをはつきり見たのだという。

どうしても信じられない僕は、町の図書館に行つて色々な図鑑を開いて探してみた。

植物の図鑑、動物の図鑑、人体の図鑑、どれも隅々まで見たけれど、やっぱり人間が木になるなんて話はどこにもないじゃないか。

「なにを探しているのかな？」

僕があまりにむずかしい顔で本を開いていたものだから、図書館のお姉さんが心配して声をかけてくれた。

さすがに町外れの木は元は人間だったんですか、などと聞けるわけもないので「人間が木になるという話があるのか探しています」と、まるで宿題かなにかをしてるふりをして答えた。

お姉さんは少し考えこむ。

ほらね、やっぱり。

「うーん、そうだねえ。ギリシャ神話に似たような話があったかもしれないよ。ダフネという河の神様の娘が、アポロンという太陽の神様から逃げるために月桂樹の木になってしまったというお話」

お姉さんは子供向けの神話の本を持ってきて僕に見せてくれた。本の挿絵には指先からだんだん木に変わっていく女の人が描かれている。その女の人の姿が僕くらいの小学生の嘘つきの子に見えて思わず本を落としてしまった。

神話の本にはダフネの他にも人間が植物になる話がいくつも載っているようだった。その中には罰を受けて植物になってしまった男の話もあり、僕はだんだんとお母さんの話が本当なんじゃないかと思えてきた。

真実を知りたくていてもたってもいられなくなった僕は、その木が本当に人間だったのか確かめることにした。

町外れの丘に行くと、そこには一本の木が立っている。

夕日を背にした影絵のような木は、濃い影を不気味に伸ばし、方々に広がった枯れた枝は、僕を手招いているように見えた。

近付くと木の様子が良く見える。枝は白茶けた枯葉を所々につけており、幹は焦げ茶色で
ごわごわしている。

思い切って声をかけた。

「君は人間だったのかい？」

やっぱりとは思ったが返事はなかった。

町外れの丘には僕以外の誰も見当たらず、僕の声だけが丘の上にむなしく漂って自信なさ
げに消えた。とたんに自分がやっていることが馬鹿みたいな気がして、急に恥ずかしくなる。

その時だった、風が吹いてもいないのに枯葉が二枚、僕のちょうど目の前に落ちてきたの
は。

見上げた梢も影絵のような葉っぱたちもまったく揺れている様子はなく、動いているのは
枝の隙間から見える空にぽっかり浮かんだ夕焼け雲だけ。

不思議な気分になりながら、僕はもう一度目の前の木に声をかけた。

「君は嘘をついたから木になっちゃったの？」

すると再び、僕のすぐ前、先ほどの落ち葉に重なるように二枚の枯葉が落ちてきた。それ
はまるで『はい』と返事をしているかのようにだった。

「君は悪い嘘つき？」

今度は三枚、どうやら『いいえ』と言っているようだ。
そんなことを何度も繰り返した。

「毎日ひとりぼっちでたいくつじゃない？」

「僕のお母さん覚えてる？」

「君の家族はこのことを知っているの？」

僕は好奇心にまかせて思いつく限りの質問をたくさんした。

どんな質問でも、その度に木は二枚か三枚の枯葉を僕の前に落とし意思表示をした。

「君は人間にもどりたい？」

『はい』

「というか人間にもどれるの？」

『はい』

「やりかたは知っているの？」

『はい』

「僕手伝ってあげようか、どうやるの？」

『……』

この質問にだけなぜか木は枯葉を落とさなかった。

恐る恐る見上げると、もう幹の色もよく見えないほどの薄闇の中、木の中から誰かがじつと視ているようなそんな気持ち湧いてきた。そういえばなんでこの木は僕の質問にこんなに答えてくれるのだろうか、もしかして僕をこの場所に留めておくためなんじゃないのかな。

僕はだんだん怖くなり、一刻も早くその場を離れたい気持ちでいっぱいになった。

「……僕そろそろ帰らなくちゃ」

そう言うと、三枚の枯葉が落ちた。

「だめだよ。お母さんに叱られるもの」

再び三枚の枯葉が落ちる。

「おねがい、帰して」

『いいえ』

「明日またくるから」

『いいえ』

「ここにいたって僕にはなにもしてあげられないよ」

『いいえ』

「君が人間にもどる手伝いもできないし」

『いいえ』

『いいえ』

『いいえ』

「どうしたら帰してくれるの？ お母さんは心配して誘拐かもって学校や警察に相談するかもしれない。そしたら僕は先生やおまわりさんに何て説明すればいいの？ 君が人間だったなんて言っても誰も信じてなんかくれないんだよ！ そんなことを言ったら今度は僕が嘘つきになっちゃうよ！」

その途端、ものすごい風が吹き、木が狂ったように梢を大きく揺らした。

辺り一面降り落とされた落ち葉が渦を巻いて、それが僕の顔や体めがけて襲いかかってくる。

怖くなって逃げようと走り出したけれど、情けないことにつんのめって転んでしまった。セーターに木の枝が引っ掛かったのだ。

ごとおおと雄叫びのように真っ赤な空が唸る。

黒々とした木の影は僕があたふたしている間にみるみる大きくなって、僕を捕らえようと折れそうなほどかぶりを振った。

こいつはもしかしてずっと自分と同じ目に合わせる仲間を探していたのかもしれない。
もし捕まったら僕も木にされてしまうのではないだろうか。

セーターにからまった枝を思いきりの力でへし折り、やっとのことで木の呪縛から逃れた僕は、転がるように丘の下まで逃げた。

こんなに走ったのはスポーツテストの時以来だ。

息を整えて少しだけ冷静になった僕は、握りしめていた木の枝を見てぎよっとした。手折った木の断面から、赤い血のようなものが流れ出ていたのだ。

振り返れば、燃え残ったような夕闇の丘の上に真っ黒な影となったあの木が揺れている。

僕は小枝を放って一目散にその場から逃げ出した。

ごおごお、ごおごお

怒鳴り声のような、あるいは泣き叫ぶ声のような風の音が、ずっと耳の奥にこびりついて離れなかった。

あれから十年が経ったが、あのときのことは今でも生々しく覚えている。偶然か勘違いだと自分に言い聞かせても、どうしてもあのときの背筋が栗立つ感覚が忘れられない。

今度あの丘に、新しい公園が出来るらしい。もちろんあの木は伐られることになるだろう。

ある日、僕はちよつとした話ついであの嘘つきの木の話を母親に尋ねてみた。

すると母親はさもおかしそうに笑って言うのだった。

「まだそんなこと信じていたの？ あんなのは作り話よ」

うそつ木^き

2024 年 10 月 26 日 発行

著者 ふじまる

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月 Y A 展示・企画冊子

編集・製本・発行 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

住所 419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとし（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。

ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

町はずれにある木は元々人間だった？ 嘘をついてばかりいると木になってしまうという話は本当なのか。調べてみた少年は木へと話しかける。「君は人間だったのかい？」

子供の目線で語られる、背筋の冷えるおはなし。

